



歌を発見し、収集した音楽学者

福岡 正太
民博 人類基礎理論研究部

アパラチアの山で

この映画は、二〇世紀のはじめ、アメリカのアパラチア山脈に暮らす人びとの歌を調査した音楽学者を描いたフィクションである。主人公のリリー・ペンレリックは、イギリスの物語歌バラッドを愛している。アメリカの大学で准教授を務めるが、十分な業績を残しているにもかかわらず教授への昇進を拒否される。不当な扱いに腹をたてた彼女は大学を後にし、妹が教師を務めるアパラチアの山へと向かう。彼女はそこで、イギリスのバラッドと共通するレパートリーが歌われているのを目の当たりにし、数々の困難にあいながらも、人びとの歌を採譜し録音する仕事に邁進する。しかし、妹が同僚の女性教師と恋愛関係にあることがばれ、学校に火をつけられ、楽譜や録音されたシリンドラーは灰と化してしまふ。そして、彼女は山で愛し合うようになったトムと身寄りのない少女デイレイディスとともに山を下り、彼らの歌をレコーディングしてもっとたくさんの人びとに聴いてもらうことを決意する。

「バーバラ・アレン」

この映画には、よく知られたバラッド「バーバラ・アレン」の三つの異なるバージョンが流れる。この歌は、イングランド、スコットランド、アイルランド、そして北アメ

きて欲しいなどと情けなく言うが、リリーはまったく意に介さず、録音機材の援助を頼みこんだ。リリーは、デイレイディスにたくさん歌を繰り返し歌わせて楽譜にとり、やがて録音機材が届くと、山を歩き回り多くの歌を集め始めるのだった。

三つめの「バーバラ・アレン」は、現在、アメリカのカントリー・ミュージックの世界で活躍するエミルー・ハリスがエンドロールで歌うバージョンである。これは数々の映画の音楽を手がけた音楽家で、グリーンウォルド監督の夫だったデイヴィッド・マンズフィールドの編曲によるもので、アコースティック楽器に加えて電気楽器も駆使したバンドの伴奏で歌われている。まさに山を下りたバラッドの現在における展開を体現していると言っていいたいだろう。リリーが楽譜から研究対象として興味をもったバラッドが、山の人びとの生活のなかに生きていく様を体験し、それを同時代の世界に広めていくために山を下りるとい

リカなど、広い地域で歌われてきた。多くのバリエーションがあるが、だいたい次のような内容の物語が歌われる。バーバラ・アレンに恋した若い男が、死を目の前にして彼女を呼び寄せる。彼は死に、悲しみのため彼女も後を追うように世を去る。二人は同じ教会に葬られ、彼の墓からはバラ、彼女の墓からはイバラが伸びて結び合う。

映画の冒頭では、リリーが大学の講義でピアノを弾きながらこの曲を歌う。使っている楽譜は、イギリスで採集された歌にピアノ伴奏をつけたものだろう。彼女は学生たちに、歌にあらわれた人びとの素朴で純粋な「心情」を味わうよう教える。しかし、この時点の彼女にとってのバラッドは、楽譜の上にするされたものだった。それを歌った人びとは、彼女にとっては想像上の存在でしかなかった。

二つめのバージョンは、妹たちが運営する山の学校を手伝うデイレイディスが歌ったものである。デイレイディスは、自分は祖母から、祖母はその母親から歌を学んだと説明する。いずれもイギリスに行ったことはおろか、山からも出たことがないような人たちだった。リリーは彼女たちの祖先がイギリスから移民して以来、これらのバラッドを伝え続けてきたことに気づく。彼女はその発見に興奮して大学の同僚で元愛人の男性に電話をかける。同僚はおろおろして、家に電話をかけるなどか、帰って

う映画の展開をこの三つのバージョンが象徴している。

バラッドにあらわれた「心情」

この作品で印象的だった場面がある。山の出身でありながら大学で学び、石炭を採掘する会社に就職したアーノ。彼は、山の人びとの土地を安く買いたたく仕事をまかされている。バラッドを集めるリリーに遭遇し、バツハの音楽の方がすばらしいと言って彼女たちをバカにする。しかし、祭りの場に酔っぱらってあらわれ、トムたちと殴り合いをした彼は、バラッドを一節歌って去っていく。彼の歌を引き取って、周りの者たちもさらにバラッドを歌う。その歌は、山での生活の先行きを覆う暗い影を感じている彼らの複雑な「心情」をあらわしているかのようだった。

山のバラッドがややロマンティックに描かれている感はあるが、バラッドをたっぷり楽しむことのできる映画である。



ネイティブ・アメリカンであるブラックフットのリーダー、マウンテン・チーフと録音に聴き入る人類学者フランシス・デンスモア(1916年)。映画のなかでリリーが使用していた機械と同様の、エジソンが発明した円筒状のロウ管を用いる録音再生機が見える。20世紀に入り、録音機は音楽や言語の研究を大きく進展させた(Library of Congress, Prints & Photographs Division, [LC-DIG-npcc-20061])



20世紀後半に入ると、ポータブルの録音機が普及し、音楽調査に欠かせないものとなった。奥はスイスのメーカー、ナグラのオープンリールテープ録音機IV-S、手前はソニーのカセットテープ録音機TC-D5(通称でんすけ)。いずれも民族音楽学者には忘れることのできない名機である(2019年)



民博による徳之島の芸能撮影。ポータブルのビデオ録画機が普及した1980年ころから、民族音楽学者一人での調査においても、踊りや儀礼のなかの音楽を映像で記録することが多くなっていった。現在は録音に代わってビデオ録画が音楽芸能の研究に欠かせなくなっている(2011年)